

此有様を見ると、いきなり、兩耳を立て、止める馬丁の手をふり離して、彼の犬に突進して其脊中に噛み付いて、友犬を離なさせましたが、可愛相に、大犬は其爲めに、脊中の肉を一片噛み取られました

(四)軍隊附きの馬

久しく、軍隊の用になれた馬だといふと、非常に兵隊さんの、練兵が好きになります、或る博物學者の言ふ所によると、年老つた軍隊の馬が、殆んど、骨と皮とに瘠せて居つてさへ、太鼓の音や喇叭の響を聞くと、忽ち、若返つて来て、若し、兵隊の行進でも見ようものなら、自分も夫に従つて行かうとして中々止められないといふことです、

嘗て、英吉利のギレンスビーといふ將軍が、印度で戦死しました時、將軍の愛馬は、部下の將士等が

大切に於て、英國まで連れて參つて居りましたが、やがて、夫を或る金満家に賣りました、然し、名譽の馬ですから、大事にして死ぬまで安樂に養つて置かうといふ、其紳士の考でありました。所が其軍隊が進軍して行つて仕舞つて、喇叭の音が遠くに消え去るといふと、さあ、此軍馬が、ふさぎ込んで仕舞つて、食物も何も食はない、そして居る中たまゝ厩から出されるのを待つて居つて、いきなり駈け出して、今迄、なれて居た練兵場まで行つて、そこで、一聲高く嘶いた後ち、斃れて死にましたといふことです。

一口話

▲流車の中で、革靴を盗まれていつて、大騒ぎをして居ると、連れの人は一向平氣で「併し、鍵さへ此

方にあれば大丈夫でせう」

▲露西亞兵の捕虜が、日本兵士の、梅干のはいつた握り飯を食べてるのを見て、「道理で、日本兵は強いと思つた、皆小さい國旗を飲み込んで居るから」

▲甲「露西亞の浦鹽艦隊は、いつも霧に助けられるな」

「さうさ、霧と露とは親類同志だもの、然し今に日が當れば、兩方とも消えて仕舞ふよ」

### 考へものゝ答

●盲人にでも見ゆるものは、(答) 夢

●自分の物であつて、自分の手に入る前に、先づ人に取られるものは、(答) 寫眞

●鳥が十羽木に止つて居たのを、鐵砲で三羽射落したら、後に三羽残つたといふのは、(答) 後の七羽は驚いて飛んで仕舞つて、射られたの丈が死んでそこ

に残るから、

### 犬のお家

冬の寒い時、一匹の犬が出来る丈け身體を小さく丸めて居ましたが、とうとう獨りで家を作らうと思ひました。

所が、夏になりましてからは、反對に出来る丈け身體を伸ばして寝ますから、自分に、大變大きく見えました。

そこで、こんなに、大きくなつたり小さくなつたりする身體に合ふ様な家を作るのは、中々容易でないと思ひました。